

会報

第 67 号 (2024/2/5)

〒720-0082
 広島県福山市木之庄町 4-3-14
 Tel&Fax 084-917-5937
 Mail
 h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp



Community Renaissance
 Research Center

2024年のはじめにあたって

代表理事 安川 悦子

21世紀といわれるようになって四半世紀が過ぎようとしています。人生100年といわれる期間の8割を超える年月を生きてきた私は、太平洋戦争中、母の実家である岡崎にちかい田舎に疎開していました。当時、小学三年生であった私は、通学の帰りに、アメリカ軍のB29の飛行機に狙い撃ちされそうになった経験があります。田んぼの畦道の影に、伏せをしてこの飛行機をやり過ごしたのです。超低空飛行をしていたこの飛行機は、ゆっくり旋回して岡崎のほうに、飛んでいきました。当時、野良仕事をしていた高齢女性が飛行機からのねらいうちにあったというニュースは新聞報道でしっていたので、隊列を組んで、集団登校や下校をしていた子どもたちへの、アメリカ軍の飛行機の狙い撃ちの恐怖は、私のような子どもたちにも共有されていたからだと思います。飛行機の上からみれば、田んぼの畦道に集団で伏せをしている図は、撃つてくださえばかりの行動であったといえるのですが、その時は必死でした。アメリカ軍の飛行機は、そのまま岡崎の市街のほうに飛んで

行きました。私の戦争体験は、たったこれだけですが。21世紀も四半世紀が過ぎようとしている今になつても、地球上には戦争が絶えず、子供や高齢者を含めた多くの命が無意味に失われています。どうしたらこうした人を殺し合う戦争をこの世から追放することができるのか。世界でおきている戦争のニュースを見るたびに、子供時代のこの経験を思い出します。この世から追放されるべき「悪」は、人が人を殺すということだと、強く思います。地球上の資源を皆んなでわけあいながら、新しい命と文化を生み出し、育んでいく。そうした社会のシステムを作り出すことに力をつくす。そうしたもののだと2024年のはじめにあたって切におもいます。



2024年1月に行われた
 仁後広場での「焚き火会」の様子

今後の予定

今号の内容

- ・ 代表理事よりご挨拶
- ・ 今後の予定
- ・ 活動報告
- ・ 書評
- ・ 編集後記

※内容は以下に記載

味噌づくりのお誘い

3月1日(金) 10時〜

場所：NPO集会所
 指導：藤原スエ子さん
 持ち物：エプロン、三角巾、お手拭き用タオル
 参加費：500円（簡単な昼食付き）
 皆さんにご好評の味噌を今年も手作りします。昼食も分担して準備したいと思えます。一緒に楽しく味噌を手作りしてみませんか。お子さん連れの方も大歓迎です。

★お申し込み★

コミュニティルネッサンス研究所

TEL：084-917-5937

メール：h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp



連続講座 オカリナが吹けるよ!

2月13・27日(火) 13時〜14時半

・講師：村山ひろみさん

(福山市立大学名誉教授)

・場所：ルネッサンス研究所 集会室

音域も広げ、「コンドルは飛んでいく」などの少し難しい曲にも挑戦しています。演歌も吹いています♪

ジェロントロジー研究会

2月16日(金) 10時〜

・場所：ルネッサンス研究所

・参加費：300円

・内容：『地域包括ケアのすすめ』178ページから。

参加者は少ないのですが、毎回各々が現在直面している高齢問題をどう考えるか、の話で盛り上がっています。

「ケアの社会学」を読む会

2月8日(木) 16時半〜

・場所：ルネッサンス研究所

・参加費：300円

・読む本：上野千鶴子著『ケアの社会学』

・内容：「第10章：市民事業体と参加型福祉」(P. 245から)

活動報告

実験と講義 「災害にどう備えるか 第二弾」の実施

12月2日、NPOの集会所にて福山市立大学の澤田教授を講師に迎え、「災害にどう備えるか」の第2弾、実験と講義「福山の土地の成り立ちと自然災害」を行いました。

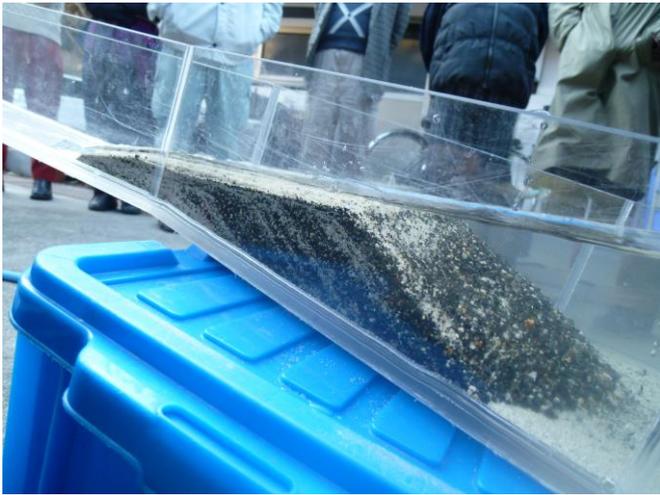
はじめに、瀬戸内の福山は低地と山地がある、という話がありました。次に川が砂を運んで来て三角州などの地形ができることを実験で確かめました。実験では、川が運んできた土砂が地形を作る様子を分かりやすく説明していただきました。こういった地形は、強振動や液状化が起こりやすく地盤沈下や道路の段差、水道管の破壊、住宅の傾斜や沈下が起こりやすい。大きな地震があった時、すぐに生死に関わらずとも避難に支障が起こることも想定してほしい。との話でした。

東日本大震災の揺れと津波の破壊力を動画で見たところ、「わあすごい」「大変」「はあ」というため息がきかれました。この地域でも想定されている津波は最大約3メートルといわれています。津波は3メートルであっても流れが強く破壊力はかなりありました。

洪水については、芦田川水系の氾濫は、1971年からの30年間で8回起こっています。たとえば、カープの優勝は30年間で6回しています。備後地域では災害が起こらないと言っているのは、カープが優勝しないというに等しいということになるので、との問いに「同」なるほど」という場面もありました。質問コーナーでは「福山市内で想定される津波は、実際どれくらい?」「水に関わる地名、つ(津)、み(水)と地盤の関係は?」などの質問がありました。

今すべき災害への備えとして、①自分の地域は安全という考えは捨てること、②住んでいる地域の地形を確認すること、③ハザードマップを見て具体的な危険を認識すること、という話でした。





川に砂が流れる様子を再現しました。層ができているのが分かりますか？



川と海にどのように砂が堆積するかの実験を行いました。

わが家でも、小学校から子どもが、「わが家のタイムライン(防災計画)」を書くシートをもらって帰って来ていました。1月1日には能登半島沖の地震もありました。津波は30センチであつても、なかなか移動できるものではないです。住んでいるところだけではなく外出した先で災害にあつても考えられます。常に災害が身近だという考えを持つことが必要なのだと感じました。

ジェロントロジー研究会

12月のジェロントロジーは参加者Aさんが関わっている「ふれあいカフェ」が話題になりました。Aさんがボランティアスタッフとして関わっているカフェでは、概ね65歳以上の方が来られ、お茶を飲みながら会話を楽しんでいる。参加費は100円、毎回20人くらいの方が来られ、カフェのある日を楽しみにしているとおっしゃる声が増える。運営するボランティアスタッフは5人くらいで毎回楽しくやっている。12月は、クリスマスのお楽しみ企画とプレゼントも予定している。とのお話でした。

「存知の通り、ふれあいカフェは、社会福祉協議会が平成6年から介護予防事業の一貫で始めた集いの場づくりのひとつで、市内でも交流館や集会所、空き室などで行われています。私も以前、おもちやサロンと同じ日に開設されていたふれあいカフェに子どもと一緒に訪れたことがありました。お茶とお菓子、夏にはかき氷など工夫されていました。高齢者の方と話をしたり、折り紙を教わっていたり、と交流したことを思い出します。コロナ禍後、こういった取り組みが戻っているのを嬉しく思います。



老後をどう生きるか

「なぜヒトだけが老いるのか」を読んで
加納三千子

1. はじめに

近年、日本は「少子超高齢社会」になり人口減少が問題になっています。その一方で、最近では「人生百歳時代」ともいわれ、定年退職後の長い老後の過ごし方が問題となっています。自分自身の問題として、老後をどう生きるかを考えているときに、『小林武彦著、なぜヒトだけが老いるのか、講談社現代新書、2023』という本を見つけました。タイトルの下には『長い老後はヒトだけが獲得したものだ』という文字も。さっそく買って読んでみると、著者は生物学者であり、なぜヒトの老後が長くなったのか、その老後をどう生きたらよいのかの示唆までありました。ここではその概略を書いてみます。

2. なぜ老後があるのか

著者は、ヒト以外の哺乳類のほとんどの動物は次の世代を残す生殖期が終わると死んでいます。だから老後がないのだと言います。なんと「老後期間」があるのはシャチとゴンドウクジラとヒトだけで、なかでもヒトは特に長くなっています。著者は老後のある三種には共通点があると言います。三種とも、社会的に子育てをしている、すなわち親以外も子育てに協力していると言います。

ヒトと同じ大型霊長類のゴリラ、チンパンジーにも老後はありません。その理由として著者はヒト

の子育てにはとても手間ひまがかかっていることをあげています。まず、ゴリラなどは大人の体の大きさに比べて小さめの赤ちゃんを産んでいると言います。それで、難産になりにくいメリットがあります。それに比べるとヒトの赤ちゃんはかなり大きく生まれて来るので親子とも大変です。

ゴリラなどの赤ちゃんは動物に見つかりやすいから鳴きません。ところがヒトの赤ちゃんは昼夜を問わず良く泣きます。そのうえゴリラはほとんど母乳メインで育ち、おしめや離乳食を与えることもありません。

3点目にはゴリラなどには体毛があり、生後まもなくの赤ちゃんも自力で母親の体毛をつかんでしがみついて移動しています。しかしヒトには体毛がありませんから親が両手で抱っこします。

「このようにヒトの子どもは育てるには手間ひまがかかって大変なのです。そこで子どもにとってのおばあちゃんや救世主として登場したのです。そうすると母親の負担は激減して子だくさんになるという選択肢が働きます。そうすると長寿が有利だという進化的な視点から「おばあちゃん仮説」というそうです。

「こうした経験を経た高齢者を一般にシニアと呼んでいます。しかしこの著者は歳を重ねた高齢者をすべてシニアとは言わないといっています。

3. 良いシニアとは

シニアは多くの失敗を重ねて、そこから多くのことを学んでいます。だから、重大な事柄に直面したとき、経験・知識・技術を背景とした最善の選択をす

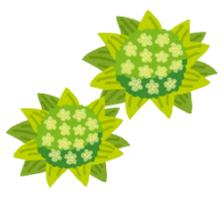
ることができません。そのようなことのできる高齢者をシニアと呼ぶに値する人たちだと述べています。そして、結論として、シニアとはこうあるべきと言っている著者の思いを次のように述べています。

『シニアが牽引して、いい意味での「長寿社会」をつくってきました。シニアには社会の調整役としての重要な役割があります。私が言いたいことは、例えば数が増えようともシニアにはしっかりとそのお役目を果たしていただきたいのです。そのため私はシニアを社会や組織から排除する一切の仕組みには問題があると思っています。』と。さらに『老いを感ぜたら、少しずつ自分のために使っていた時間を社会のため、次世代のために使うのは、それまで楽しく生きてきた人ほど、幸せに感じられることだと思っています』とも述べています。

この本を読んで、歳を重ねても社会との関わりを持ち、これまで培った知恵を使って社会に還元することができるような自分の生き方を考えていきたいと思いました。

最後に、「この本の著者が思っていることを表現したような短歌をみつけました。

「八十路坂見えざりしこと見えてくる歳重ねる
「この楽しさ」(毎日新聞、2024.1.18)



編集後記



新型ウイルスが落ち着いてきたかと思えば、戦争、地震など、胸が苦しくなる出来事が現実として起っています。少し心がそわそわしている時、私は先生を訪ねます。高齢者と呼んでしまうと失礼に当たるかもしれないませんが、先生の言う所の経験・知識を備えた良いシニアである先生とお茶をしながらお話をすると、ゆったりとした気分になり、家路に着くことができず。

世代を超えての交流はなんと頼もしいことか!!

(菊)



NPOへのお便り募集!



「ミルネへのお便りを募集します。ご感想・ご意見などをTEL・FAX又はメールアドレスにお寄せ下さい。